



日本における福清呉服行商に関する研究

張, 国楽

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2010-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5090

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005090>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	張 国楽
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学 位 記 番 号	博い第 5090 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	2010 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

日本における福清呉服行商に関する研究

審 査 委 員

主 査	教 授	王 柯
	教 授	石原 享一
	教 授	岡田 浩樹
	准教授	貞好 康志
	神戸大学名誉教授	安井 三吉

論文審査の結果の要旨

氏名	ちょうこくらく 張 国楽		
論文題目	日本における福清呉服行商に関する研究		
判定	合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	王 柯
	副査	教授	石原 享一
	副査	教授	岡田 浩樹
	副査	准教授	貞好 康志
	副査	名誉教授	安井 三吉

要 旨

本論文は、第二次世界大戦終結前の日本華僑社会における重要な存在であった呉服行商を取り上げ、その歴史のプロセスを分析することを通して、呉服行商の圧倒的多数を占める福清呉服行商の歴史全体像を明らかにするものである。

本論文は序章と終章を含めて9章から構成されている。

序章「課題と構成」は、先行研究に対する検討を通じて、資料上の制限などによって、福清呉服行商に関する研究において未解明のまま残されている問題点が多く存在すること、先行研究による結論のなかで再検討しなければならない点が多く存在すること、全体像が不明瞭であることを指摘した。その上で、自ら入手した呉服行商の帳簿、外務省外交史料館が所蔵する呉服行商に関する資料、外事警察の記録など第一次資料の特徴と価値を紹介し、本論文の目的、特徴、意義及び研究方法、特殊用語について説明した。

第一章「日本へ渡航する福清人」は、終戦までの在日福清華僑の来日史を辿りながら、各時期によって異なる来日の歴史的背景を明らかにし、さらに、その来日の特徴を検証した。その上で、来日の要因の究明に努めた。

第二章「福清華僑の居住・職業」は、華僑の居住・営業を大きく左右する日本の対中国人政策を分析しながら、福清華僑がいかにその政策に対応して、各時期において、居住地、職業を転換していたのかを明らかにした。

第三章「呉服行商業を営む福清華僑」は、福清華僑がいつから呉服行商業を始めたのかを検討した上で、呉服行商業の独占の実態を明らかにした。また、福清華僑が集中的に呉服行商業に従事するようになった原因を究明し、福清呉服行商の親方制度についても検討した。

第四章「福清呉服行商の実態」は、福清呉服商「福益号」について検討した上で、その帳簿に対する分析を行った。次いで、帳簿を通じて、福清呉服行商の生活、商業活動、経済実態、顧客との関係などの全貌の解明を目指した。

第五章「福清呉服行商と日中戦争」は、まず、日中戦争に入ってから強化された対中国人政策を検討した。その上で、戦争下の福清呉服行商が日本当局からいかなる取締、監視などを受けたのか、そして、戦争が福清呉服行商の商業活動にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにした。

第六章「福清呉服行商の団体と三縁」は、福益号の帳簿と福清県東瀚村北窓の家系図を通じて、福清呉服行商の血縁、地縁、業縁という三縁を分析し、その内部のきずなを明らかにした。さらに福清華僑の三位一体の団体の職能と特徴を分析した。

第七章「在日華僑のなかの福清呉服行商」は、日本華僑社会の看過できない一集団としての福清呉服行商がいかに華僑社会に参入し、地位を向上させたのかを検討し、彼らの政治活動を明らかにした。さらに、終戦後、行商をやめた福清華僑がいかに新たな分野へ展開したのかを検討した。

終章は、以上の検討を通じて明らかになったことを踏まえ、残された課題と今後の研究方向について説明した。

従来の日本における華僑研究の多くは、東南アジア華僑・華人を主たる対象に行われてきた。一方、日本華僑に関する研究は、商業ネットワークに関する研究が中心であり、雑業等に対する研究は不足している。本論文は、歴史の大きな流れの中で研究の意義を捉える意識が不十分であること、商品の生産、仕入れ先と顧客層などについての考察はさらに掘り下げることができるといった課題を残しながらも、在日福清華僑呉服行商の研究に正面から取り組み、外務省記録、外事警察文書はもとより、特に京都「福益号」の帳簿、「旅日福建同郷名簿」などの第一次史料の分析と関係者へのインタビューを通じて、ミクロレベルでの福清華僑呉服行商の軌跡と親方制度や組織の実態等を明らかにして日本華僑研究を一步深めた。これは、華僑研究だけではなく、日本社会史の分野においても活用できる貢献をしたといえよう。

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は、学位申請者張国楽は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

なお、本論文の一部は下記の2本のレフェリー付き論文としてすでに発表されている。

1、「1920・1920・30年代における在日福清呉服行商の実態と動向——『福益号』を通じて」（『歴史研究』44号、大阪教育大学、2007年3月、1-34頁）

2、「二戦前在日『福州幫』的社会網絡及其特点」（「第二次世界大戦以前在日『福州幫』の社会ネットワークと特徴」、『東南学術』2010年第3期、中国福建省社会科学院、154-166頁）

論文内容の要旨

氏名 張国楽
専攻 人間文化科学
論文題目 日本における福清呉服行商に関する研究
指導教員氏名 王 柯 教授

論文要旨

本論文の目的は、第二次世界大戦終結前の日本華僑社会における重要な存在であった呉服行商を取り上げ、ミクロ的な分析を通して、呉服行商の圧倒的多数を占める福清呉服行商の歴史全体像を考察することにある。

従来の日本における華僑研究の多くは、東南アジア華僑・華人を主たる対象に行われてきた。一方、足元の日本華僑の研究は、商業ネットワークに関する研究が中心であり、雑業者に対する研究はきわめて不足している。したがって、雑業者への考察は日本華僑の研究にとって必要であり、この点を補うことは、日本華僑の研究のみならず、華僑研究全体に対しても貢献できると考える。

呉服行商や三刀業者などの雑業者は、貿易商とともに、終戦までの日本華僑の二大主軸の一つとして華僑経済を支え、終戦前の日本華僑社会で重要な存在であった。その中でも、福清呉服行商は日本において、中国人呉服行商を独占し、重要な役割を果たしていた。そのような実情にもかかわらず、福清呉服行商に関する先行研究は極めて少ない。したがって、日本華僑の研究にとって、呉服行商を検討の対象にする作業は必要であり、さらに日本華僑社会の特質を鮮明に明らかにするためにも、福清呉服行商に注目して検証を行なうことは、極めて意義あることと考えられる。

福清呉服行商を対象として検討を行なうなかで、それに関わる日本の対中国人・行商人政策、日中戦争が福清呉服行商に及ぼした影響を与えたのかを明らかにすることは重要である。それらの解明によって日中関係及び日中戦争の一面を明らかにすることにもなる。この点から見れば、福清呉服行商に対する研究は、華僑史のみならず、日中関係史の研究に対しても貢献できると考えられる。

また、現在の日本華僑社会での重要な存在である福清華僑に関する研究は、1970年代以後の成功者を主たる対象とする傾向が強いと見られる。しかしながら、現在の福清華僑が

収めた成功は終戦までの呉服行商業を営む歴史と大きく関わっている。現在の福清華僑の研究にとっても福清呉服行商に関する研究は重要といえる。そして、福清呉服行商に対する検討は、福清華僑史研究の中で、欠かせない構成であり、重要な役割を持つ作業であると考えられる。

以上の先行研究の現状と筆者の問題意識を踏まえて、本論文では終戦までの在日華僑の歴史を辿りながら、日中関係の歴史にも注目しつつ、呉服行商の圧倒的多数を占める中国福建省福清県出身に焦点を当て、主に彼らが日本華僑社会においてどのような役を演じてきたのかという歴史像を詳細に描き出し、ミクロ的な分析を通じて在日福清呉服行商の全体像を考察することを課題とする。

本論文の構成と内容は以下の通りである。

第一章「日本へ渡航する福清人」では、終戦までの在日福清華僑の来日史を辿りながら、各時期によって異なる来日の歴史的事実を明らかにし、さらに、その来日の特徴を検証した。その上で、来日の要因を究明した。

第二章「福清華僑の居住、職業」では、華僑の居住・営業を大きく左右する日本の対中国人政策を分析しながら、福清華僑がいかに関与し、その政策に対応して、各時期において、居住地、職業を転換していたのかを明らかにした。

第三章「呉服行商業を営む福清華僑」では、福清華僑がいつから呉服行商業を始めたのかを検討した上で、呉服行商業の独占の実態を明らかにした。また、福清華僑が集中的に呉服行商業に従事するようになった原因を究明し、福清呉服行商の親方制度についても検討した。

第四章「福清呉服行商の実態」では、福清呉服商「福益号」について検討した上で、その帳簿に対する分析を行った。次いで、帳簿を通じて、福清呉服行商の生活、商業活動、経済実態、顧客との関係などの全貌を解明した。

第五章「福清呉服行商と日中戦争」は、まず、日中戦争に入ってから強化された対中国人政策を検討した。その上で、戦争下の福清呉服行商が日本当局からいかなる取締、監視、鎮圧などを受けたのか、そして、戦争が福清呉服行商の商業活動にどんな影響を及ぼしたのかを明らかにした。

第六章「福清呉服行商の団体と三縁」では、福益号の帳簿と福清県東瀚村北窓の家系図を通じて、福清呉服行商の血縁、地縁、業縁という三縁を分析し、その内部のきずなを明らかにした。さらに福清華僑の三位一体の団体の職能と特徴を分析した。

第七章「在日華僑のなかの福清呉服行商」では、日本華僑社会の看過できない一集団としての福清呉服行商がいかに華僑社会に参入し、地位を向上させたのかを検討し、彼らの政治活動を明らかにした。さらに、終戦後、行商をやめた福清華僑がいかに新たな分野へ展開していたのかを検討した。

以上の検討を通して、明らかになった諸点は以下の通りである。

1、福清華僑の来日の歴史の変遷とその原因。

16世紀から盛んに来日し始めた福清華僑は、18世紀に入るまでの間に、船主として来日する者が多かったが、1715年の「正徳新例」の公布から1873年の「日清修好条規」の発効までは、主に船員として来日することになった。1873年からは商人として来日したが、1899年の「勅令352号」の公布後、福清華僑は終戦まで主に行商人として来日し続けた。そのなかで、1931年の満州事変後、家族として来日する者も多かった。このような、時期によって異なる来日パターンは、福清華僑の特徴と言える。

来日の原因として、経済的困難はもとより、福清人の出稼ぎの意識、投資観念、冒險精神なども、来日の要因として大きく作用していたのである。受け入れ側から見れば、日本における家族や親族、同郷などの存在は、福清華僑の来日の一要因となった。

2、来日した福清華僑の居住と職業、それに関わる日本の中国人に対する政策。

長崎貿易時代において、福清華僑は唐人屋敷に閉じ込められ、商業活動も不自由であった。福清華僑が居留地での居住と営業が自由化されたのは1871年の「日清修好条規」の締結以降である。1899年までは、集中的に長崎に居住し、主に京貨商・商人として行商の活動を行っていたのである。「勅令352号」が公布されてから、福清華僑は呉服行商として長崎から各地へ進出し、行商をしながら日本全国に分散し始め、日本の各地域に居住するようになった。

日本の対中国人政策は歴史的に一貫して「単純労働者」を受け入れてこなかった。そのため、中国人労働者・行商人は日本当局の主たる取締対象となっていた。近代日本の中国人に対する政策としては、主に1867年から実施された華僑の籍牌登録制度、1894年に公布された「勅令137号」、1899年に公布された「勅令352号」、1918年の「内務省令第1号」などの法令に基づいてなされた。そのなかで、勅令352号は福清呉服行商に極めて大きな影響を与えた。

3、福清華僑と呉服行商業の関係。

長崎貿易時代において、商人・船員として来日した福清華僑は、中国から持ち込んだ

呉服類商品を長崎で売り歩き、すでに呉服行商業を始めていた。「勅令352号」の公布によって行商人の内地居住・営業が認められてから、福清呉服行商は日本各地に進出し始め、1920・30年代のピーク期を迎え、業界を独占することになった。そのなかで、親方制度の役割はきわめて大きかった。親方制度は、呉服行商業の始まりと同時に形成されるものではなく、呉服行商の増加に応じて誕生したものであった。福清呉服行商のなかで、親方や売子、独立行商人などの三者の関係は、不変固定的なものではなく、売子が生活面で独立できるようになると独立行商人へと転換することができ、さらに独立行商人は十分な資本金を有すると、親方になれるわけである。このような親方制度は福清華僑独自のものと言える。

4、福清呉服行商の実態。

福益号とは、京都にあった福清呉服行商の間屋である。福益号の帳簿への分析を通じて、福清呉服行商の実態を明らかにした。福清呉服行商の生活は苦しく、多くの福清呉服行商は、数人で一つの小さな部屋に同居し、毎日大体生活費を20銭(当時)に切り詰めるという生活を送っていた。精神面では中国の伝統的な民間宗教信仰に頼っていた。

家からかなり遠く離れたところへ行商するのが普通であった。販売は現金売りと掛売りの二種類があったが、主に掛売りで行われていた。販売する商品としては呉服類商品の全般であった。

親方は数千円の資本金を有すると運営できる。売子や行商Bは400円あれば、行商Aになれる。売子から行商Bへの転換は数十円でもできる。収入は、親方の場合で月収は100円前後で、行商人の場合はその売り上げによって異なり、月30-70円が普通であった。この経済実状の解明は日本華僑の経済実態の一面を示唆している。

5、日中戦争が福清呉服行商に与えた影響。

満州事変後、数多くの福清呉服行商は引き揚げた。だが、1933年から、戦争情勢の一時平穩化や国内の不安定、在日家族の呼び寄せ、成功者からの原動力などによって、数多くの福清華僑が再び来日した。そのなかで、家族として来日する者が目立った。

1937年7月の盧溝橋事変の影響を受けて、福清呉服行商は再び故郷へ引き揚げ始め、その引き揚げは終戦まで続いた。日本に残った福清呉服行商は、敵国民として日本国民からの感情的排斥を強いられただけではなく、日本当局から日常的な監視、検挙、強制送還、弾圧、迫害などを受けざるを得ないという状況となった。また、営業面においても、1942年から実施された繊維製品の統制は、福清呉服行商の活動に極めて大きな影響を与え、売

上は悪化の一途を辿った。多くの福清呉服行商は行商をやめ、帰国したり、転職したりした。福清呉服行商は在日中国人の一集団として、日中戦争の影響から免れることができなかった。

6、福益号から見た福清呉服行商のきずな。

福清呉服行商の内部に強い血縁、地縁関係が存在していた。福益号は単なる血縁関係によるものではなく、同じく福清出身者という地縁関係によるものでもあり、東瀬村北窓の一族を中心に、東瀬村の林姓と他の村出身の他姓の呉服行商によって構成されており、重層的同心円の関係構造としてとらえることもできる。

福清呉服行商は、1899年に最初の三山公所（長崎）を結成してから、次々と各地で自らの団体を設立した。その団体は血縁、地縁、業縁という三縁によって形成された同郷団体であり、同職団体でもあった。自らの特徴を有し、大きな役割を果たした。

7、日本華僑社会の重要な存在としての福清呉服行商。

雑業者としての福清呉服行商は、貿易商を中心とする華僑団体に排斥されたが、戦中、貿易商が大量に帰国するにつれ、華僑社会に参入し始め、華僑社会での地位を向上させ、日本華僑社会の大きな変化を及ぼし、日本華僑の看過できない存在であった。

そして、経済的かつ社会的に地位の低かった呉服行商業に従事するにも拘らず、福清呉服行商は駐日中国国民党に加入し、政治面でも活躍していた。それは、福清呉服行商の政治動向を描き出すだけでなく、日中戦争期における日本華僑の政治動向をも示唆しており、中国人としてのアイデンティティのあらわれと言える。

終戦後、福清呉服行商のほとんどは行商をやめ、新たに料理業をはじめ幅広い分野へと進出し、戦後の重要な地位を築き上げ始めたのである。彼らは呉服行商の多かった兵庫、京都、北海道、東京、大阪及び九州の鹿児島、長崎、福岡、宮崎、熊本などの都道府県に集中的に居住するとともに、日本全国にも分散していた。それは、行商の足跡が残っていると言える。

今後の研究課題として、以下の点が挙げられる。

第一に、現代の在日福清華僑のネットワークを考察することである。1961年に創立された福清華僑を主体とする旅日福建同郷懇親会は、戦前の福清呉服行商のネットワークの延長線上にあると思われる。現在でも引き継がれているが、時代が下るにつれて、懇親会の参加者や役割が変わっているのが現状である。三世、四世の福清華僑がその懇親会に対してどのような認識を持っているのか、福清華僑のみならず、全体の日本華僑にとって直面

しなければならない問題である。

また、1980年代から始まった留学生としての福清出身者の来日は、30年後の現在でも盛んに行われている。留学生としての彼らは現在の在日福清華僑とどのような関係を持っているのか、そのネットワークにたいしていかなる影響を与えているのか、これらに関する検討は現在における在日福清華僑の研究にとって必要であると考えられる。

第二に、雑業者を構成する重要な集団であった三刀業者を検討することである。特に現在の日本華僑社会で唯一残っている料理業者に関して検討する必要がある。三刀業のうち、理髪業と仕立業はほとんど消えてしまったのに対し、なぜ料理業のみが相変わらず継続しているのかは興味深い問題であると思われる。

第三に、福清華僑と閩南華僑との比較検討である。両者は同じ福建省出身にもかかわらず、歴史的にはまったく異なる華僑集団として存在してきただけでなく、現在でもそれぞれのネットワークを持っている。この点に関する検討は難しいと思われるが、間違いなく、日本華僑社会の構造解明に意義のあることと言える。